

教師の手だて（板書、教具・資料、小グループ活動、個別化）

板書

教師の発問と同様に、板書計画（導入から終末までの授業の構想を考えること）は重要です。授業後の板書を見れば子どもたちの思考の流れやめあてからまとめまでの学習の深まりなど、すべてが分かるともいわれます。子どもの**興味・関心を集中**させたり、**考えを比べ**させたりするという黒板の基本的な機能を意識することが大切です。主な留意点は、次の4点です。

留意点① → 教師の提示する固定的内容と、子どもの発言を書く流動的内容のバランスに配慮する。

留意点② → チョークは白が基本。色チョークは、用途を決めて使う。

留意点③ → 最後尾の席から見える大きさ、正しい書き順で、ていねいに書く。

留意点④ → 光の反射などで黒板が見えにくい時は、カーテンを締めたり、席を移動させたりする。

カードや模造紙、さし絵、図表などを掲示することも黒板の機能を広げます。また、電子黒板などの機器も、板書との機能の違いを生かして、積極的に併用しましょう。

教具・資料

教師自作の教具には温もりがあります。自作にあたっては、授業の中で「何が大事なのか」を十分吟味するとともに、あまりに多くの時間や労力をかけ過ぎないようにすることも大切です。

教具や資料を使う主なねらいは、次の4点です。

ねらい① → 授業への**興味、関心**をもたせる。

ねらい② → 問題を**発見**させ、**把握**させる。

ねらい③ → 考える**ヒント**を与え、**見方**を深めさせる。

ねらい④ → 考えを**確かめ**させ、**総合的に理解**させる。

なお、資料は、難解であったり多過ぎたりしないよう、子どもの発達段階を踏まえることが前提です。いい資料は、一つでも**多様なねらいに応え得るもの**です。



小グループ活動

小グループ活動には、少人数で意見が出しやすく個が活かされる、助け合いや共同作業がしやすい、などの良さがあります。しかし、小グループの活動をよく見ると、一人または二人の子どもが中心になって話し合いを進め、他の子どもが一言も話さないという状態が見られることもあります。これでは、個を生かすどころか、埋没させてしまうこととなります。

特に、生活グループをそのまま学習グループとして活動させる場合は、個々の子どもに対する教師の**細やかな気配り**が一層必要になります。「はい、話し合いなさい」ではなく、**考える材料や操作の道具**などがあるだけでも、子どもたちの活動は、活発になります。

小グループ活動は、話し合いのほか、**作業、製作、実験、演技、演奏、調査研究、ゲーム**など、様々な活動の際に取り入れることができます。どの場合にも、個々の子どもがそれぞれに生きるような教師の配慮が必要であり、一斉の授業より、さらにきめ細やかな指導が求められます。

個別化

問題をどんどん解いていく子どもがいれば、ゆっくり正確に解く子どももいます。直感的に理解する子どもがいれば、ていねいに説明することで分かる子どももいます。

個々の子どもの個性や特性に応じた学習を支援するためには、一斉授業だけでは、どうしても限界があります。

そこで、**形態を個別化**したり、**複数の手だて**をとったりする必要があります。

また、個によって**めあて**や**内容**まで変えることも考えられます。

さらに、教室に**個のためのコーナー**を作ったり、空き教室や特別教室を活用したりするなど、**子どもの個性を把握し、個性をより発揮できる環境**をつくることも重要です。

参考文献 『実践 教師の心得帳』 荒木隆著 日本教育新聞社、 『達人に学ぶ授業力』 千葉市教育センター・千葉大学

お問い合わせは、**教育センターへ**（平成24年2月）

福岡市教育センター ホームページ <http://www.fuku-c.ed.jp/center/>
〒814-0006 福岡市早良区百道3丁目10番1号 TEL 092-822-2876(研究支援課)



授業の基礎技術

— 子どもの力を引き出し発揮させるために —

「新しいふくおかの教育計画」では、「公教育の福岡モデル」において、重視する教育の内容の一つとして、「子どもの力を引き出し発揮させる教育」を掲げています。

このことを具体化する教育活動の中心は「授業」です。

この「授業の基礎技術 —子どもの力を引き出し発揮させるために—」は、教師が授業において、子どもを的確にとらえるための心構えを、教師の「姿勢」「コミュニケーション」「手だて」の三つの柱からまとめたものです。日々の授業の反省や、校内研修などで活用してください。

教師の姿勢（態度、まなざし、話し方、聞き方）

態度

教室に入った瞬間から、授業は始まっています。ドアを開けて教壇に立ち、「起立、礼」の挨拶までのわずかな時間でも学級全体の状態がわかります。まずは教室全体を見回し、一呼吸、間をおきましょう。このとき「おや、あそこの席が空いているな」「あの子は、青い顔をしているな」など、短時間で個々の状態を見抜き、場合によっては「〇〇さん、気分が悪いんじゃないのかな」など声をかけます。

これらのことで子どもたちは、（この先生は、自分たちをよく見てくれる、見ようとしてくれている）という安心感をもつようになります。担任教師の態度は、「**明るく生き生きと**」が基本です。

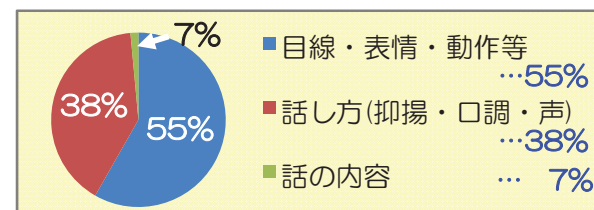
まなざし

授業中の教師の「もう少し、がんばれ」という励ましの目、「さあ、思い切って手を挙げてごらん」と促す目、ほめる目、叱る目など、「**目で語る**」ことは、教師の重要な技術の一つです。子ども全体を視野に入れながら、**一人一人とアイコンタクト**をとることを大切にしましょう。子どもの目を輝かせるためには、教師自身が目を輝かせ、目で語る事が大切です。



話し方

アルバート・メラビアン(アメリカの心理学者)の「人の話は何によって伝わるか」の研究によれば、



上図のとおり、言語情報(話の内容)よりも、視覚情報や聴覚情報が、大きな要素を占めています。

教師は、このことを頭に入れて、**表情や動作、音量・声音**を意識します。初めは静かに語りかけ、大切なときに「先生が本気だ」と思わせる声色が、教師の真剣さを子どもに伝えます。自分の授業を録画し、自分の話し方を振り返ることも有効です。

聞き方

教師自らが「しっかり聴いていますよ」という態度を見せることが大切です。

◇**聴く=身を入れながら**

子どもの意見を、受容的な態度で最後まで聴きます。大切なことは、子どもの話を**途中で遮らないこと**と、**すぐに否定しないこと**です。

◇**聞く=リターンしながら**

「なるほど」などの**あいづち**や子どもの**発言を繰り返しながら**聞きます。子どもに安心感を与え、発言を促進させることができます。

◇**訊く=尋ねながら**

教師が「**尋ねたり、ふくらませたり**」、他の子どもに「**振ったり**」することで、さらに子どもたちの発言が増え、授業が活性化します。

教師のコミュニケーション（間、発問、指名、一瞬の対応、コメント、立ち位置）

間(ま)

1時間丸ごと授業を録音して、子どもの声と教師(自分)の声が聞こえている時間をストップウォッチで集計してみましょう。子どもの声より教師(自分)の声の時間が長いようだとしゃべり過ぎかもしれません。

◇沈黙の(間)

授業では、教師の声が聞こえる時間を少なくし、子どもの声の聞こえる時間を増やすこと以上に、実は**何も聞こえない沈黙の時間(間)**が重要です。何も聞こえない時間は、子どもたちが、何か活動しているか、「なるほど」と納得したり、「そうかな」と考えたりしている時間だからです。

◇説明と発問の(間)

教師の説明に続き、切れ間なく発問されると、子どもにとっては理解が追いつかず、落ち着いて課題をとらえることができません。少し間を置き、「では、問題です」と発問しましょう。

発問

発問には、大別して基本発問と、補助発問があります。

◇基本発問

発問計画づくりでは、まず基本発問をつくることが重要です。授業では、本時の目標にせまる発問の柱を三つ程度考えます。基本発問を考えることで、子どもたちの反応を予想し、展開を考えることになりやすいため、基本発問の計画は、授業の組み立てそのものといえます。

◇補助発問

補助発問は、その場に応じた臨機応変な問いです。基本発問が難し過ぎた場合は、補助的な発問により、子どもの思考を助けます。したがって、基本発問が子どもたちに理解できれば、補助発問は少なくなります。

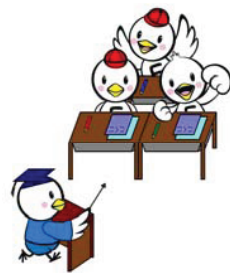
子どもたちの学習に変化をもたらす緊張を誘う発問づくりを意識すると → 授業が知的好奇心に満ちたものになります。
→ 子どもたちの学ぶ意欲が向上します。

発問については、子どもの思考上、「ある程度抵抗感があり、しかも、半数以上の拳手が期待される問い」が良いと言われます。しかし、場合によっては「誰もが答えられる易しい問い」や、「皆が黙り込むような難しい問い」も必要です。

留意点①→ 発問するという事は、子どもに考えることを促しているのですから、

発問の後に説明や、指示、助言などを、はさまないようにしましょう。

留意点②→ 発問して、だれも手を挙げないとき、発問を言い換えてしまうことがあります。微妙な言葉の言い換えで、かえって、子どもは混乱してしまいます。発問は言い換えしないで済むように十分練っておきましょう。



指名

教師の指名順序や指名する子どもが固定化することは、学級経営にまで影響を与えてしまいます。

授業における教師の指名にあたっては、**指名の順序を変えたり、子どもが指名し合う**などの工夫を行うとともに、**意図的な指名**を心がけましょう。指名には大きく四つの方法があります。

◇**ラウンド型** = 子ども全員の確認や評価をしたいときなどに、順々に全員を指名する方法

◇**ピックアップ型** = 話し合いを収束・促進させたいときなどに、目的に応じて数名を指名する方法

◇**ボタン型** = 話し合いを活発にさせたいときなどに、発言した子どもが、次の発言者を指名する方法（男子同士の指名が続くなど、指名に偏りがないように留意）

◇**ネームプレート型** = 短時間で子ども全員の考えや思いを把握したいときなどに、子どものネームプレートを黒板上に貼らせる方法（全員指名の一方法で、内面を可視化する方法）

これらの指名方法の他に、「あらかじめ、前の時間に子どもたちが書き込みをしたノートやプリントを見て個々の考えなどを把握し、今日の授業で指名する子どもを予定しておく」「今日の授業の理解度を把握するために、焦点をあてた数名の子どもを意図的に指名する」、などの方法もあります。

一瞬の対応

教師が発問し、子どもが答え、それに教師が対応します。この一瞬の対応によって、子どもは自分の発言の良否を鋭く感知します。

一瞬の対応には**評価の要素**が含まれますので、学習効果や子どもの意欲に大きな影響を及ぼします。ベテラン教師の授業が安心して見られるのは、子どもへの瞬間的な判断と配慮があるからです。一瞬の対応では、次の三つのことを心がけましょう。

子どもから予想外の意見がでたときは

対応①→ 周りの子どもに投げかけてみましょう。

※ 困った時こそ、周りの子どもたちの考えを引き出し、授業の再構成を図ります。

対応②→ あえて間違えてみましょう。

※ 子どもの「知的正義感」を刺激して、ピンチをチャンスに変えます。

子どもの言っていることが理解できないときは

対応③→ 一緒に考え(調べ)ていきましょう。

※ 子どもは、教師が真剣に反応してくれたことをしっかり受け止めます。

子どもの反応が十分でないときは

対応④→ 活動を変えましょう。

※ 考える活動から書く活動に変えてみるなど、活動に変化をつけます。

コメント(解釈)

授業の中で子どもの気持ちを高めたり、学びを深めたりするためには、子どもの発言に対する教師のコメント(解釈)が有効です。

この教師のコメントには、**強化と評価の要素**が含まれるので、コメントによって授業が変わり、子どもが変わります。コメントには、大きく三つの機能があります。

機能①「意味づける」

「〇〇さんは、〇〇くんの考えを聞いて、新しい発見をしていますね。」

これは、発表の内容を、どの子どもにも理解できるように学習の中に意味づけるコメントです。学習が深まります。

機能②「価値づける」

「〇〇さんの発表は、みんなとちがって()と、いうところがいいですね。」

これは、他の子どもが気づかなかった良さを全体に知らせるコメントです。発表意欲が高まります。

機能③「新たな視点を与える」

「みんなの考えは()ということでもいいですね。でも、()という考えもできますよ。」

これは、子どもたちの「学び合い」に、新しい視点をもたせるコメントです。子どもの見方・考え方が広がります。

立ち位置

「教師の立ち位置を変えることで何がかわるか」「立ち位置で教師が気を配ることは何か」ということを理解した上で、立ち位置を選びます。授業中の教師の動きは、授業技術の一つとも言えます。立ち位置には、大きく四つの型があります。

型	効果	①ポジション・②対象	より効果を高めるポイント
一斉指導型	子ども全員への指導や指示を徹底するときに	①黒板前、正面中央 ②同時に全員が対象	・全員とアイコンタクトをとる ・メモなどを見ながら話さない
全員把握型 (机間指導)	子ども全員に達成感を味わわせたいときに	①机間指導(ゆっくり1周) ②1人(全員)が対象	・全員に声かけをする ・基本的には、ほめる
状況把握型 (机間指導)	グループ学習などの状況を把握したいときに	①机間指導(2~3周) ②同時に4~6人が対象	・声かけはしない ・各グループの状況を観察する
見守り型	子ども全員の学習状況を把握したいときに	①教室後方 ②同時に全員が対象	・背中を見て、表情を想像する ・必要があれば、前に出て話す

机間指導では、子ども一人一人の学習状況を観察し、その後の授業を組み立てる必要があります。観察の結果、その場ですぐ個別指導をすることもあれば、全体的な指導をしたり、授業の軌道修正をすることもあります。全員の観察や、支援を要する子どもの観察など、**意図的に机間指導**を行いましょ。

机間指導で個別指導をする際は、その子どもの思考を深めるとともに、他の子どもにも配慮する必要があります。できれば、子どもの顔と同じ目線で、小声で話すようにしましょう。